

はじめに

熊本保健科学大学学長 小野友道

このブックレットは熊本保健科学大学主催「猫についてのシンポジウム―オムツを穿いたトラの物語」（平成二十一年二月二十三日）をまとめたものです。

なぜこのようなシンポジウムを開催したのか。このことからお話させてください。

平成二十年夏、熊本保健科学大学のキャンパスに子猫が二匹捨てられていました。看護学科の学生たちが、それを気にして新しい親探しをしました。一匹はすぐもらわれていきましたが、もう一匹、この子がトラなのですが、後ろ脚が不自由で、排便がうまくいかないため、ずっと飼い主が決まりませんでした。獣医の診察では手術が必要とのことでした。学生たちはその費用を出ししようと募金活動を始めました。このことが熊本日日新聞に取り上げられ、多くの寄付が集まり、励ましの便りも届きました。

結果的に手術の必要はなく様子を見ることになりましたが、相変わらずオムツを穿いたままでした。見かねた本学事務局長の石原さんが、家で飼うことを申し出てくれました。

わたしは、励ましや寄付をしていただいた方々に、事の顛末を報告をせねば済まないと感じました。そして、このトラに出会ってきつと学生たちが多くのことを学んだに違いないと確信しました。それは命の大切さだったのでしょうか。見知らぬ人からの善意の温かさだったのでしょう

か。ぜひ聞いてみたい衝動に駆られました。

そうだ、この機会に皆で、猫について考えてみようではないか。いったいぜんたい猫を飼う、あるいは猫を捨てるということは、どういうことなのか。そもそもペットって何だろう。こんなことを考えるシンポジウムを開催してみようと思いはじめたのです。

二月二十二日は、にやんにやんの日なのでこの日にしようか、いや日曜はダメだ。さてさてシンポジストは誰にとか考えているうちに、昨年暮れ、週刊誌「AERA」(2008・12・8)の記事「殺処分ゼロ 熊本の挑戦」が目飛び込んできました。熊本市動物愛護センターの取り組みはすごいものでした。最善のシンポジストは身近にいるではないか。これは是が非でもセンターの久木田憲司所長にお話ししていただきたいと思いました。それから順調に開催に向けて準備が進みました。ペットなどからヒトに感染する病気についても熊本大学皮膚科の井上雄二講師が快諾してくれました。後は本学の教授たち専門家が担当することになりました。

まあこのようなことで、「猫についてのシンポジウム—オムツを穿いたトラの物語—」が開催されたのです。ちょうど、本年は熊本保健科学大学が、その前身の化血研衛生検査技師養成所設立(昭和三十四年)から五十周年に当たりますので、このシンポジウムはその記念事業の一つとなりました。

*

ところで昨年は漱石の『吾輩は猫である』のモデルの黒猫、こちら名前は無いのですが、その猫が亡くなって百周年でした。明治四十一年九月十四日の晩に病死したのです。もちろん小

説『吾輩は猫である』の黒猫の方はビールを飲んで酔っ払い、大きな甕に落ち込んで死んでしまったのはご存知の通りです。甕の中でもがいていましたが、「次第に楽になってくる。苦しいのか難有いのか見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支はない。ただ楽である。否楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉齏ふんせいして不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏々々々々々々々々々々。難有い々々々々」と大往生してしまおうでした。一方、病死した夏目家の本物の黒猫は、埋葬され、主人漱石が黒梓くしつきの死亡通知の葉書を知人に送っています。

「辱知＊₁猫義久く病気の処療養不相叶昨夜いつの間にか、うらの物置＊₂のヘツツイの上にて逝去致候埋葬の義は車屋にたのみ箱詰にて裏の庭先にて執行仕候。但主人『三四郎』執筆中につき御会葬には及び不申候 以上 九月十四日」

この黒猫没後百周年（年が明けましたので百一周年ですが）の記念としてもこのシンポジウムの意義があると勝手に思っています。熊本の五高で教えた漱石先生のこと、よもやいらぬこととお怒りにはなりませんまいとたかをくくっております。先日、久しぶりに五高記念館を訪れましたら、廊下で黒猫がなきながら近づいて来ました。少し前からいるそうで、名前を「三四郎」と名づけているとのことでした。これも何かの縁でしょう。

さらに五高で学生として漱石先生に出会った寺田寅彦も、黒猫の死亡通知の葉書を漱石から受け取った一人でした。その寅彦、どうやら猫が好きだったようです。例えば手元の随筆集『柿の種』

(昭和八年発表)を捲っただけで、八篇の猫についての話があります。飼い猫の三毛やその子の「ボウヤ」の話などです。一つ二つ紹介させてください。

三毛が死んだので、「三毛の墓」という歌を寅彦は作っています。詩ばかりか作曲もして、その譜面も掲載されています。

「三毛のお墓に花が散る　　こんこんごめの花が散る　　小窓に鳥影小鳥影　　〈小鳥の夢
でも見ているか〉

三毛のお墓に雪がふる　　こんこん小窓に雪がふる　　炬燵蒲団の紅も　　〈三毛がいない

でさびしいな〉

もう一つ。

「大震災の二日目に、火災がこの界限までも及んで来る恐れがあるというので、ともかくも立ち退きの準備をしようとした。その時に、二匹の飼い猫を、だれがいかにして連れて行くかが問題となった。このごろ、ウエルズの『空中戦争』を読んだら、陸地と縁の切れたナイアガラのゴートアイランドに、ただ一人生き残った男が、敵軍の飛行機の破損したのを繕って、それで島を遁げ出す。その時に、島に迷って餓えていた一匹の猫を哀れがっていっしょに連れて行く記事がある。その後に、また同じ著者の『放たれた世界』を読んでいると、〈原子爆弾〉と称する恐るべき利器によって、オランダの海をささえる堤防が破壊され、国じゅう一面が海になる、その時、幸運にも一艘の船に乗り込んで命を助かる男がいて、それがやはり居合わせた一匹の迷い猫を連れて行く、という一くだりが、ほんの些細な挿話として点ぜられている。この二つの挿話から、私は

猫というものに対するこの著者の感情のすべてと、同時にまた、自然と人間に対するこの著者の情緒のすべてを完全に知り尽くすことができるような気がした」というエッセーです。『柿の種』読んでみてください。寅彦の猫への優しい思いがきつと伝わってきますよ。

*

猫のシンポジウムを考えていると、やはり新聞を読む際にも猫の文字がやたら気になりました。日本経済新聞（平成二十年十一月二十一日）に「地域猫定着への苦悩」の特集がありました。地域猫とは何ぞや。野良猫に餌をやることなのか。全く知らない言葉でした。地域猫は熊本にもいるのでしょうか。また、ペットフード工業会の推計では飼い猫数は二〇〇七年度で約千三百万匹、一方、全国の動物愛護センターに引き取られた猫は二〇〇六年度、二十三万二千五百匹という膨大な数です。不景気でこの数はまだ増えそうだと思います。

さらに熊本日日新聞（平成二十一年一月五日夕刊）の「猫は食べ物じゃない」もショックでした。中国広東省で猫を食用としていていることへの抗議活動が広がっているというニュースでした。「猫の肉は広東料理の食材で、冬場の煮込み料理に使われ、一日一万匹前後が…」とありました。驚きましたが、でも、食文化の違いで外国人が驚く食材は、どこの国にもいくらでもありそうです。日本では猫は食べられていなかったのでしょうか。

もう一度『吾輩は猫である』の猫に登場願いまししょう。この小説の冒頭を思い出してみてください。「吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか」と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間とい

うものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である」。どうです、日本でも同じだったのではないですか。もっとも江戸時代に猫は食用にすべきではないといわれていましたが、食すべきでないということは、食していたことの証左にほかなりませんよね。猫と文化、そんなことも考える必要がありそうです。猫は神様だったり、化け物だったり、虐殺されたり、あるいは福猫、招き猫などと、猫と人間の関係は何とも複雑のようです。

この物語が終わった後で、果たして皆さんの猫に対する認識が変わるのか変わらないのか、それも聞きたいところです。

それでは「オムツを穿^はいたトラの物語」の始まりです。最後までごゆるりと。

- * 1 自分を知っていてくださるの意、知り合いであることを謙遜するという語
- * 2 土間にあるかまど

参考文献

- 寺田寅彦『柿の種』岩波文庫、一九九六
- 夏目漱石『吾輩は猫である』新潮文庫、昭和四十九年
- 出久根達郎『ZEN人間講座 漱石先生の手紙』日本放送出版協会、二〇〇〇
- <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%82%B3>
- ロバート・ダーントン（海保真夫・鷺見洋一訳）『猫の大虐殺』岩波書店、二〇〇七